

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 17 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520842

研究課題名(和文) 寺院史史料による古代地域社会の復原研究

研究課題名(英文) Research of the ancient community by historical materials left in the temple

研究代表者

吉野 秋二 (YOSHINO, Shuji)

京都産業大学・文化学部・准教授

研究者番号：50403324

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、文献史学の立場から、寺院史史料を活用して、日本古代の地域社会の実態を復原し、評価したものである。本研究は、広隆寺周辺地域、善通寺周辺地域を主要対象地域とする。これらの地域は、資財帳や荘園絵図など地域景観を、時代を通じて、面的に考察し得る史料をもつ。本研究では、寺院経済史の見地からこれらを活用し、歴史地理学・考古学分野の調査・研究成果も踏まえ、古代地域社会の実態をリアルに復原した。

研究成果の概要(英文)：This study is one in which from the point of view of literature history, with the help of temple history historical materials, the restoration of the actual community of ancient Japan, was evaluated. This study, to be the main target area Koryuji surrounding area, the Zentsuuji surrounding area. Through the era, these areas have the historical records that may be discussed in-faceted, such as the regional landscape manor illustration and Shizai book. In this study, we take advantage of these temples from economic history point of view, also based on surveys and research results of historical geography, archeology field, was righting the real reality of the ancient community.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：広隆寺 善通寺 地域史研究 資財帳 荘園絵図

1. 研究開始当初の背景

(1) 文献史学による古代地域社会研究は、官大寺が集中する畿内近国地域、荘園絵図が多数残存する北陸地域などを中心に推進されてきた。石母田正『日本の古代国家』(岩波書店、1971年)、吉田孝『律令国家と古代の社会』(岩波書店、1983年)などの古代社会論も、そうした成果を包摂する形で構築された。

1990年以後は、歴史地理学・考古学との共同のもと、古代荘園絵図研究が推進された。古代荘園絵図を網羅的に検討した金田章裕・石上英一・鎌田元一・栄原永遠男編『日本古代荘園図』(東京大学出版会、1996年)は、代表的研究成果である。その他、大和国京北班田図など多彩な史料が残された大和国西大寺周辺地域に関しては、佐藤信編『西大寺古絵図の世界』(東京大学出版会、2005年)「額田寺伽藍並条里図」をもつ額田寺周辺地域に関しては、仁藤敦史編『国立歴史民俗博物館研究報告 88 古代荘園絵図と在地社会についての史的研究 - 「額田寺伽藍並条里図」の分析』(2001年)なども発刊された。これらは、方法論的な意味も含め、本研究の前提となるものである。

研究代表者は、2010年、単著『日本古代社会編成の研究』(塙書房)を出版した。本書は、第一部身分制論・社会集団論、第二部徭役制論の二部構成をとり、古代の社会編成を具体的かつ体系的に分析したものである。しかしながら、都城をフィールドとする制度史的研究が主体で、村落を含む地域社会の実態的考察という点では課題を残した。

また、研究代表者は、平成17年～21年度、奈良女子大学21世紀COEプログラム「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」(平成16年度～21年度)にCOE研究員として従事し、考古学・美術史学・国文学・地理学などの研究者と共に、奈良時代以前の大和国を対象とする共同研究に参加した。同プログラムでは、史料集『平城京史料集成(二) 条坊関係史料』(2007年)を責任編集し、「奈良盆地歴史地理データベース」(現在、奈良女子大学古代学学術研究センターにおいて部分公開中)構築にも関与した。その過程で、地域社会に視座をおく古代社会論の必要性を痛感した。

以上のような経緯から、今回、科研費を申請し、本研究に取り組むことを決意した。

古代地域史研究の史料的制約を乗り越えるためには、基準となる良質なケーススタディの蓄積が肝要である。そこで、本研究では、資財帳、荘園絵図(指図)など地域景観を面的に考察し得る史料をもつ地域、具体的には、山城国葛野郡広隆寺周辺地域、讃岐国多度郡善通寺周辺地域を主要検討対象とした。

(2) 広隆寺に関しては、文献古代史では秦氏研究を中心として、美術史学では彫刻史分野を中心として、膨大な研究蓄積がある。しか

し、創建・移転に関する論争など特定課題に関心が集中する反面、9世紀以後の変遷に関しては、研究が進んでいない。

その中で、金田章裕「平安初期における嵯峨野の開発と条里プラン」(『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂、1985年、初出1978年)、川尻秋生「資財帳と交替公文 広隆寺帳を中心として」(『日本古代の格と資財帳』吉川弘文館、2003年、初出1990年)は、注目すべき成果といえる。

前者、金田論文は、山城国葛野郡の条里復原を一新し、特に「山城国葛野郡班田図」故地である嵯峨野地域の開発史、特に平安初期の勅旨田開発を復原したものである。しかし、「広隆寺資財帳」、「広隆寺資財交替実録帳」などに関する考察は、条里復原中心の基礎的・概括的なものに止まっている。後者、川尻論文は、交替公文制の観点からの貴重な基礎研究だが、寺院経済史的視点がなく、資財帳・交替実録帳の財産帳簿としての性格を十分に捉え切れていない。

(3) 一方、善通寺周辺地域に関しては、平安中期～江戸期の善通寺文書、宮内庁書陵部所蔵の久安元年(1145)善通曼荼羅寺寺領注進状などの豊富な史料が残されている。特に、善通寺文書に残された徳治2年(1307)善通寺近傍絵図(善通寺一円保指図、善通寺領絵図)に関しては、歴史地理学分野において条里制研究の格好の材料として注目されてきた。1980年代以後は、中世荘園絵図研究の隆盛もあって、中世史、考古学の研究者を交え、復原研究が進められた。

かつて高重進は、『古代・中世の耕地と村落』(大明堂、1975年)に収録された諸論文で、徳治2年の村落景観を久安元年段階、さらにそれ以前に遡源させる形で条里景観の復原を試みた。これに対し、高橋昌明・吉田敏広「善通寺近傍絵図調査報告」(『科学研究費補助金報告書 荘園絵図の史料学および解読に関する総合的研究』滋賀大学教育学部、1985年)は、鎌倉期の善通寺文書の記述を根拠に、久安元年～徳治2年に谷池の造営など灌漑状況の画期的変化が存在したことを主張し、現在通説化している(金田章裕『微地形と中世村落』吉川弘文館、1993年など)。しかし、高橋・吉田説は、基本史料の史料解釈・評価、近世史料・発掘調査成果の活用という点で難点がある。

本研究では、以上のような研究状況を踏まえて、先行研究が分析した基本史料も含め、関連する分析材料を改めて再検討し、新事実の発見を目指した。

2. 研究の目的

本研究は、文献史学の立場から、寺院史料を活用して、日本古代地域社会の実態を復原し、評価することを目指すものである。

古代地域史研究の史料的制約を乗り越えるためには、基準となる良質なケーススタディの蓄積が肝要である。本研究が、主要対

象とする山城国葛野郡広隆寺周辺地域、讃岐国多度郡善通寺周辺地域は、資財帳、荘園絵図（指図）など地域景観を面的に考察し得る史料をもつ。

本研究では、文献史学の立場、特に寺院経済寺院経済史的視点から基本史料を再検討する。さらに、対象地域に関する歴史地理学・考古学分野の調査・研究成果を踏まえ、綿密な現地踏査を実施し、寺院を核とする古代地域社会の実態をリアルに復原する。

広隆寺を創建した秦氏は、古墳時代以後、桂川流域の地域開発を推し進めた。善通寺を創建した佐伯氏も、空海を輩出し、満濃池修造事業を主導している。古代豪族がいかんして生き残っていったのか、その際、地域支配の拠点として寺院はいかなる機能を果たしたのか、困難な課題を探る貴重な事例研究となるはずである。

社会経済史分野は、1960年代～70年代には、理論・実証の両面で日本古代史研究をリードした。しかし、その後は、長い沈滞状況が続いている。前述の古代荘園絵図研究の前進も、史料学的な次元にとどまり、如上の沈滞の打破につながっていない。

本研究は、荘園絵図・寺院資財帳などの基礎史料の解析を基礎として、日本古代社会の実態的・全体的な把握を目指すものである。考古学・歴史地理学など他分野の研究者に対して、文献古代史の特性を発信し、方法論的側面も含め、学際的研究の礎を構築することを目的とする。

3. 研究の方法

(1)山城国広隆寺周辺地域に関しては、まず、最も真憑性が高くかつ情報量の多い9世紀代の基礎史料を対象として、再検討を行った。特に『広隆寺資財帳』・『広隆寺交替実録帳』水陸田章については、近世史料の情報も収集し、一坪単位で現地の地勢条件と照合する作業を実施した。

次に、山城国葛野郡域に関する諸史料について、京都市編『史料京都の歴史』（平凡社）に集成されたものを中心に検討した。水利関係に関しては近世史料も含めて分析材料とした。

また、京都市右京区・西京区域の発掘調査成果の通覧・検討も実施した。（財）京都市埋蔵文化財研究所の発掘調査報告書データの大部分は、国際日本文化研究センターの考古学 GIS データベースに収録されているが、その他のものも含め、京都府立総合資料館、京都大学大学院文学研究科図書館などで通覧した。

現地踏査は、広隆寺の膝下所領が集中する太秦・花園地域、山城国葛野郡班田図が残る嵯峨野・嵐山地域を対象として、逐次実施した。葛野郡の条里復原の再検討を行うと共に、文献史料・考古資料の検討によって得た知見を確認した。

特に 2011 年 8 月 20 日に開催された第 39

回古代史サマーセミナーの現地見学会では、太秦・花園地域の見学会の講師を担当し、実際に現地を踏査しながら参加した古代史研究者と意見交換を行った。

なお、2011 年 6 月には、京都産業大学日本文化研究所例会において、吉野秋二「平安前期の広隆寺と周辺所領」と題して、また、2013 年 4 月には、古代寺院史研究会において、吉野秋二「広隆寺靈験薬師移安伝承と願徳寺」と題して、口頭報告を行った。後者では、古代寺院史研究会の参加者と共に、櫻原廃寺、宝菩提院廃寺など山城国乙訓郡・周辺地の古代寺院跡の踏査、出土資料の観察なども実施した。

(2)讃岐国善通寺周辺地域に関しては、「善通寺近傍絵図」など、善通寺文書に関する検討が中心となった。『香川県史』収録の古代・中世史料を中心に、厳密な再検討を実施した。その際、香川県歴史博物館「善通寺総合調査報告」(1)(2)（『香川県歴史博物館調査報告』2号、3号、2006年、2007年）の成果も随時活用した。

善通寺周辺は、弥生時代以来、讃岐有数の大規模集落が連綿と営まれた地域である。近年の発掘調査では、条里・水利・道路跡など古代・中世につながる成果が蓄積されつつある。本研究では、善通寺市教育委員会、香川県埋蔵文化財センターなどが実施した発掘調査の報告書を、京都大学大学院文学研究科図書館などで通覧した。

また、現地の研究者・埋蔵文化財関係者からの聞き取り作業を実施した。古地図、郷土史史料など一部史料については、香川県立図書館などで閲覧した。また、現地踏査も、夏期・冬期などに数回実施した。

なお、2012 年 5 月、日本史研究会古代・中世合同部会において、吉野秋二「徳治二年「善通寺近傍絵図」の再検討 古代・中世讃岐平野の水利と開発」と題して口頭報告を行った。

4. 研究成果

(1)広隆寺周辺地域に関しては、学術論文、吉野秋二「平安前期の広隆寺と周辺所領」（『古代文化』第 64 巻 3 号、2012 年）を発表した。この論文は、『広隆寺資財帳』と『広隆寺資財交替実録帳』の所領に関する記載を検討し、9 世紀中・後期の寺院経営を全体的に復原し、古代寺院と地域社会形成の歴史的關係を追究したものである。

まず『資財帳』、『交替実録帳』と承和 3 年（836）12 月 15 日『広隆寺縁起』について考察し、広隆寺の資財管理方式が所領とそれ以外で異なること、承和 3 年の再建開始を契機に資財管理方式が刷新されたことを確認し、史料の所領記載について概括的に考察した。

次に各論的分析に入り、秦長蔵氏の氏寺である安養寺に関して、天長年間に広隆寺所領の一部が時限的に割譲されたこと、中世

寺誌の記述、割譲所領の分布などから広隆寺南西の西野町遺跡に比定できること、弘仁9年の広隆寺焼失以後、被災を免れた仏像などが一時的に移管され、割譲所領はその供養田であること、以上3点を指摘した。最後に広隆寺周辺地域の開発史について、「六条並里」に広隆寺が領有した池が双ヶ丘と五位山の間に存した「双ノ池」の一部に相当すること、承和3年～寛平2年、灌漑条件の急激な変化は確認できず、桂川左岸においても葛野大堰を水源とする用水路が承和3年以前から存していた可能性が高いこと、以上2点を主張した。

(2) 善通寺周辺地域に関しては、口頭報告、吉野秋二「徳治2年「善通寺近傍絵図」の再検討 古代・中世讃岐平野の水利と開発」(2012年5月8日、日本史研究会古代・中世合同部会、日本史研究会事務所)を行った。この報告は、徳治2年(1307)「善通寺近傍絵図」(「徳治絵図」と略す)、久安元年(145)善通曼荼羅寺領注進状(「久安注進状」と略す)を再検討し、古代・中世の善通寺周辺地域の開発史を復原したものである。

前半では、まず保延4年(1138)に成立した一円保(善通寺・曼荼羅寺の周辺所領)の概略を、両寺周辺の地理的状況なども含め概説した。その上で、現在通説化している高橋昌明・吉田敏広説の論拠を、近世史料の情報も踏まえ再検討した。結果、「徳治絵図」に描かれた二つの湧水は、現在の壱岐湧と二頭出水に相当すること、「久安注進状」と「徳治絵図」から窺える一円保の灌漑状況は大局的には大差がなく、「久安注進状」段階でも弘田川から両岸地域に対する引水が行われていたこと、以上二点を指摘した。

後半では、まず善通寺百姓が「徳治絵図」を随心院に提出した意図について検討した。そして、直前の争論の終結を受け、弘田川東岸地域における主要水源の灌漑範囲を図示し、湧水時に命綱となる湧水の用水権を確保を図った、と推定した。次に「徳治絵図」に描かれた大池の造営時期について、周辺が佐伯氏の伝統的奥津城であることを指摘し、「久安注進状」以前のかなり早い段階、奈良時代(またはそれ以前)に遡源し得る、と主張した。最後に、空海の満濃池造営に触れ、出身氏族である佐伯氏の地域開発と連関する可能性を示唆した。

(3) その他の研究成果としては、以下のものがある。

まず、吉野秋二「長岡宮「西宮」・「東宮」と嶋院」(財)向日市埋蔵文化財センター『向日市埋蔵文化財調査報告書』91、2011年)を公表した。本論文は、従来不明であった長岡宮第一次内裏「西宮」と推定される遺構の発掘を受けて執筆したものである。第二次内裏「東宮」、宮内離宮「嶋院」などとあわせ、長岡宮中枢施設の構成と変遷を復原し、政治史的見地からその意義を論じた。広隆寺周辺地域に関する研究成果とあわせ、平安初期の

山城(背)国の地域史について理解を深めることができた。

また、吉野秋二「京の雑徭」(『日本歴史』782号、2013年)を公表した。『延喜式』に京の正丁の雑徭が6日以下と規定されている点に着目、大宝令制の60日から30日、6日と日数が軽減される時期を確定し、その意義を論じたものである。律令国家の地域支配に関する基本制度に関する実証論文で、吉野秋二『日本古代社会編成の研究』(塙書房、2010年)を補強する成果である。

なお、広隆寺に関する研究と関連して、口頭報告、吉野秋二「広隆寺靈験薬師移安伝承と願徳寺」(第24回古代寺院史研究会、2013年、向日市文化資料館)を行った。中世の諸史料には、平安前期、山城国乙訓郡願徳寺から広隆寺に薬師仏が移安されたとする伝承が、さまざまなバリエーションで残されている。本報告は、それらを広隆寺別当道昌信仰に関する史料群として捉え、その史料価値を検討したものである。広隆寺とその末寺とされる諸寺院との関係、葛野郡・乙訓郡・紀伊郡など山城国の秦氏居住地域の連関について考察する足がかりを得た。

また、日本史研究会の「律令公民制成立史の行方」をテーマとして開催された2012年1月例会にコメンテータとして参加し、「律令公民制成立史研究の課題と展望」と題してコメントした。律令公民制成立史研究の理論・実証両面の主要な論点について、報告者の市大樹、大隅清陽の両氏と、有意義な意見交換を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

吉野 秋二、京の雑徭、日本歴史、査読有、782、2013、pp34-36

吉野 秋二、平安前期の広隆寺と周辺所領、古代文化、査読有、64-3、2012、pp35-54

吉野 秋二、長岡宮「西宮」・「東宮」と嶋院、(財)向日市埋蔵文化財センター向日市埋蔵文化財調査報告書、査読無、91、2011、pp119-124

〔学会発表〕(計4件)

吉野 秋二、広隆寺靈験薬師移安伝承と願徳寺、第24回古代寺院史研究会、2013/4/6、向日市文化資料館

吉野 秋二、徳治二年「善通寺近傍絵図」の再検討 古代・中世讃岐平野の水利と開発、日本史研究会古代史・中世史合同部会、2012/5/8、日本史研究会事務所

吉野 秋二、コメント 律令公民制成立史研究の課題と展望、日本史研究会例会「律令公民制成立史の行方」、

2012/1/8、京都機関紙会館大会議室
吉野 秋二、平安前期の広隆寺と周辺所
領、京都産業大学日本文化研究所例
会、2011/6/1、京都産業大学

6 . 研究組織

(1)研究代表者

吉野 秋二 (YOSHINO, Shuji)
京都産業大学・文化学部・准教授
研究者番号：50403324